

二十二日の記

嗚呼此世とはは何ぞや。

世態を見るに付けて思ふかな。嗚呼此世是れ何者ぞと、問いかけて、

自分は今静かにこゝに座っている。つらつら考えてくと悲愁の感が涙とともに湧いてくる。何を考えるのかよく見よ。自分が日々相接している人物とその出来ごとを。かの吉見チエの一生はどうなるのだろうか。アヤの一生は、大島尚三の一生は、市山一家の人々の一生は、またわが家の人どもの一生はどうなるのだろうか。紛々と色々であろう。この

国木独歩の

佐伯での生活

(十六)

山内武麟

賛助会員

(佐伯市城下東町)

悠々とした天地にこの世態は、これは調和があるのかどんな意味があるのか。ほんの束の間の人間の生命、その人間の煩惱を考えると、この生命は謎である。

嗚呼此の天地、而して此の世相、此の吾、此の生命は是れ神の人に投げ給ひし謎か。悪魔の投げしわなか。と、世相・世態を嘆いている。

そして

この天地の悠々とした大観念で写し出した世相や人物が、はじめて詩となる。たゞ世相を描写し、人物を写し出しても何もならない。天地の悠々に対するこの世相、この人物はよく見ると宗教となり、詩となるのである。と、詩の本質を明らかにしてある。

二十五日

自分は帰省してから詩歌も読まず、歴史も読まない。それに悲しい思いがやまないのは何故であろう。

見聞したことが何を示したのか。接したことが何を語ったのか。

天地の悠々さを感じながらも、この世相を看たからである。

嗚呼悠々たる天地、而して此世相。

と、帰省して見聞したこと接したことに色々悲しい哀れさを感じている。

二十八日の記

午前一時半、三ヶ浜久保田旅館にて、と、書き出して

二十六日夜、岸の下港を太田川丸で出発し、二十七日朝宇品港に着いた。宇品では吉川旅館に泊った。朝、広島町の町に出て買物をした。午後は思索と昼寝をし悲喜こもごも感じながら過ごした。夜七時半小蒸汽で宇品を出発して、只今この地に着いた。

次には次々と考えたこと感じたことを書き並べてある。月日は絶え間なく過ぎていく。自分はあれをしたりこれをしたり、これを感じあれを考え「現在」に連続している。自分の地上での生命に限りあることは事実である。決して無限ではないことを知っている。連続する現在とはどんな意味をもつか、夢幻の経過か、進歩の段階か回想して泣き悲しむ程か、それとも希望信仰の道程か。自分はこれに答えなければならぬ。

次に

天地の悠々を感じて而して他の吾の命運・行為・挙動・事條・心情を思ふ。哀絶・悲絶。

と、ある。他の吾を心からあわれんでいる。

次に

自分は願わくば信ずるところで楽しくありたい。たゞ信ずるところで楽しくありたい。だから常に剛毅でありたい。薄弱は悲哀を生み、悲哀は薄弱を生む。多く他の吾もそうであつて欲しい。だから自分は益々剛毅でありたいと思う。

悲哀は天地の寂莫を感じさせる。自分は果して恋することが出来るか、恋とは果して薄弱な人間の煩惱で害するものであるか。自分はそうと信じない。

あゝ恋、誰れかが云つた、恋は智慧と両立しない。と人間がこの寂莫とした天地にあつて恋愛を断ち切つたら何でこの心の温さを感じようか。

人間壮年にして多感なり。やゝもすれば哀絶のうちに死す。只だ恋愛はこれを救ふ。只だ迷ふと其の暗きに陥るに至りては末のみ。

と、恋愛を謳歌している。そして、

吾果して彼の乙女を恋ふるか。希くば神聖なる恋ならしめよ。天地悠々を感じる幽玄の情と共に女性の心情に感応せしめよ。

と、ある。彼の乙女とは誰か不明であるが、一人の女性

に對し恋心が芽生えたらしい。

愛と、希望と、讚美とが自分の命であるのなら、凡ての人間の「吾」を支配する命もこれである。恋はその清らかさから見るとこの三つに貫流する泉ではあるまいか。

詩人、月を仰いで嘆ず。やゝもすれば曰く

今人不見古時月 今月曾經照古人 古人今人若流水

共看明月皆如此。と。

これは天の明月を仰いで天地の悠々を感じたのである。勿論哀絶の句である。月を見てこの感のないものがあるうか。この美妙、幽玄、不可思議な天地の中で忽然と逝つてしまう、吾らの生命、限らない感傷を免えないものであるうか。

そして更に考えよ。この悠々とした天地に於ける、あの人の人たちの命運やふるまいや言語や感情や思想を。例えば自分の母の如きはどうか。この人の一生の意味はどこにあるか。この天地の中にある意味は？。勿論客観的に云えばこの人としてこの人相應の意味をこの天地の間にきざむのに違いない。しかし「吾」という主観からこの人を客観したらどうか。この人の吾は天地の美妙を感じない。人生の希望も神の存在も自己自身も感じるこ

とはない。たゞ習慣・境遇・事情のまゝに感応するのみである。その心は温かで智慧はさとい。しかし結局は醉生夢死するに過ぎない。

嗚呼此の人の吾。これ此の悠々の天地の間に果して何の意ぞ。

と、問い、人間とはたゞ個人の一つの小さい我のみか、この天地は幻と信じるべきか、人間とはたゞそれぞれに独立した煩惱と見るべきか？、そうであれば失望である。自分はそうとは信じない。信じないとは云つても人の吾の意味を知ることが出来ない。悲しいことである。と、悲しんでいる。

三十日の記には

吾は渺手たる個人なる哉。されど偉大なる人間なり。個人よりすれば誰れか渺々たる一小我ならざらん。人間よりすれば誰れか雄大偉高なるソールならざるべきと、個人として見れば小さいが、人間とは雄大偉高のソールの持主であると確信している。

次に

二十八日の正午、佐伯下りの肱川丸に乗り込んで三ヶ

浜を出発し、昨二十九日午前十一時に佐伯の坂本邸に帰着した。

三ヶ浜からの航海は風波が荒れて乗客の多くは船酔いをした。自分も苦しみもだえ嘔吐して閉口した。しかし弟の収二は平気であった。

佐伯に帰った。驚いたことは桜の花が満開であったことであつた。思うに国許より半ヶ月程気候が早い。

帰って机の上を見ると、手紙には金子馬治君・大久保余所五郎君・高木正雄君・水谷真熊君・徳富猪一郎氏から来ていた。雑誌には「国民の友」数冊、「早稲田文学」七冊、「家庭雑誌」等あつた。

今日、水谷君・大久保君・金子君に返書を出し、市山正さん・吉見チエさんに安着を報らせ、また面白いことを書いてやった。徳富氏には今度の印刷所を起こすことを詳しく報らせて、五百円の借金を頼んだ。

郵便を出しに行った序に収二を連れて散歩し、城山の後をめぐって例の八幡社の幽境をさぐり、例の岡の谷の坂の静けさを呼吸し、例の招魂場の谷間に出てとうとう招魂場に行つて桜花を賞した。歩く道すがら小品文が却つて美しさを發揮し得るものであることを語つた。菜の

花・桜花・蓮花草・すみれの咲き出た野辺を歩く楽しみは人生の至樂であると思つた。煩惱の苦悶から脱して美妙の境に住み得ることは人間の幸福である。地上に於ける幸福の一つである。

昨日、自分の寓居の二階の室に着いたとき「早稲田文学」を手にするや否や、前から待ちかまえていたのですぐ金子馬治君の書いた「シヨウペンハウエル」を読みはじめとうとう読んでしまった。何となくもの足りないように感じたがこの大厭世哲学者の面目を多少とも知り得て喜んだ。今日金子馬治君に出した手紙に「意及び想としての世界論」の英訳書の購入の周旋を依頼して置いた。金子君と高木君との手紙の中に中桐君の苦悶のことを報らせてあつた。また佐伯の青年の一人で教会員の重人である、生徒の中で第一とも云うべき者である飯沼源治君が目下心を苦しめているとのことである。

今日一日中手紙を書くのにその大半を費やしたが、その余りで「早稲田文学」を拾い読みした。

今や夜の九時、春雨蕭々として窓の外に來り、蛙鳴門前の水田に喧びすしくして天地却つて寂寥たり。

吾は愈々静かに此記を続けざる可からず。

と、書いて帰国して見聞したことやそれに対して感じたことを次々と記してある。

扱て今度帰国して、果してどんな人生のページを読み得たか、多くの人と接した。色々な事情を見たり聞いた。また自分にも少なくない経験もした。これできつと多少の進歩をなし得たと信じた。

嗚呼吾とは何ぞや。此の悠々の天地の意味如何。かかる真摯壯嚴なる感想に打たれたる心を転じて、此の實際の人物、生活、社交と接近す。吾が心愈々人生の玄妙不可思議を感じるも無理ならじ。

と、記して、

大嶋尚三・吉見のおば・東のおば・三好幾馬・少女達わが父と母。市山の一家の人々・神田老女・検事鶴田進などこれらの人物の「吾」と、ウオーズウオースの吾、カーライルの吾、シヨウペンハウエルの吾と、人間の吾であるということではどんな違いがあるのだろうか。

もし冥想してこれらの「吾」の主観を考えると、実に身ぶるいし、悲しくなり、いよいよ人生の不思議を感じるものである。

自分は何ごとも知らぬ、たゞこの諸の吾を思うて無限

の悲哀を感じるのである。あゝこの人々の命運はどうなるのであろうか、と。

国木田哲夫の主観から彼らを評すると、彼らは酔生夢死するいとも浅間しいものどもである。天地の美妙も感ぜず高尚な希望もいだかない。たゞ煩惱に苦しみながら談笑している。しかしこのように評してもそれは自分の評である。しかもこれがこの人々の吾がこの天地の中に刻んでいる事実であることをどうしようもない。嗚呼此の事実、其の意味は如何。と、記してある。

そして次に、

それ故に自分は一種の列伝を編さんしてみたいと考えた。その人物には大嶋尚三あり、ウオーズウオースありシヨウペンハウエルあり、カーライルあり、わが母あり、鶴田進もある。言い換えると哲学者あり、農夫あり、商人であると問わず。この天地間に実在する「吾」の差別を写すためである。そうして人に大我の平等感に入らしめるのである。博愛の精神を悟らせるのである。自分にこのことが出来るかどうかかわからないが、想と筆と観察とを怠らずによく練つたら出来るのではないかと思う。

次に、

嗚呼吾とは何ぞや。此の自然とは何ぞや。問ふ事愈々繁くして吾をして愈々幽玄、神聖の氣に打たしむ。

客觀から見ると、どんな大人豪傑でも結局は一時代、一境遇、一生命にかぎられている。吾もそうである。結局吾の吾であるに過ぎない。しかし主觀からすると人間はこんな狭い小さな吾では満足できない。古今を貫き、宇宙を包懷し、大我平等に入り、生死の境から脱し、自由永久の國を希望するのでなくては満足出来ない。

人を救うことはその人の吾を救うのである。人を愛するともその人の吾に同情を表すことがより大切である。と、主觀論を説いている。

次に

美妙ノ「吾」は美妙の感に打たるゝ時に於て煩惱を脱し、小我の人非人境を免がれて僅かに人情の幽音に耳を傾け得る也。美妙ノ美妙ノ決して解剖し得べきものに非ず。愛、愛、これ亦然り。

と、美妙感の尊さを述べ

あゝ宇宙にある美妙の神よ、この吾に自由な筆を与えよ。

とも角も、自分は美妙と愛との自由・永久・平等な境に平和で満足で幸福な生涯を送りたい。一生は真面目なものである。不自由と苦悶と罪惡とにつぶされてはならない。

然らば恋愛よノ爾は吾の敵に非ず。吾は爾を信じ爾に頼り、爾を知らんことを希ふ 恋愛よ。

と、あこがれの恋愛をよく知りたいと願っている。しかし恋愛は小我の煩惱で、大我・平等・救世の敵か。自分はまだよく恋愛を知らない。

自分はこの乙女を恋う。しかしまだ決して痛切な恋愛とは言われない。恋愛の中に神聖な人間性があるならこれ願う。もしたゞ男女の馬鹿らしい夢ならば一日も早くこれから目ざめることを願う。と、ある。

次に

自分に著作者としての虚栄心があるなら、神よ、即座に自分を殺せ。願くば美妙を發揮する詩人として満足を得たい。この心をだけ保っているなら一文を作り得なくても、そのまゝ死んでもよい。著作そのものには何の意味もない。自分は先ず自分の信じるところで人として生存し、その次に著作者としてことを為そうと望んでいる

のみである。

と、美妙を發揮し得る著作者となることを目指している。そして次に

人性美妙を愛す。美妙は古今と靈界とを一貫す。嗚呼人性よ。吾は只だ爾を信ず。オ、神よ、造り主なる神よ。吾をして此性を養はしめよ。凡て諸の他の吾の爲めに

と、美妙を愛する性格を充分養いたい。そんな美妙を愛する人間になりたいと叫んでいる。

三十一日

昨日午前は独乙語を勉強した。午後二時から登校して授業をした。三時にやめ、富永・尾間・山口の三人を連れて帰宅し、しばらく談話して一しよに散歩した。招魂場の桜花が夕陽に輝いているのを見て帰った。

その帰り道で生徒たちに人間は美妙の感情をよく養うことが出来たら幸せである。幸福と満足は美妙感が最高であると話して聞かせた。

また、元越山の夕陽の美を指さして話した。ウオーズ

ウオーズの詩を引用して話し、その話をしつゝ自分自身美妙の力をつらつらと感じた。

と、美妙感の尊さを話している。

昨夜は収二の爲めに昨年この頃の記を読んで聞かせた。

それが終つて外出して買物をした。帰つて「国民の友」の特別寄稿欄に酒井雄三郎氏が寄稿した「社会問題の真相」を読んだ。

石崎ためさんから手紙がくる。

酒井雄三郎という人は肥前鍋島藩士の家に生れ、明治十四年、中江兆民の仏学塾で学び後官途に就いたが二十五年辞めて、社会問題研究著述翻訳に従事した。三十二年フランスに渡り巴里で客死した。享年 四十二歳。

